

古屋敷遺跡

第3次発掘調査概要報告

1991. 3

大和郡山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、大和郡山市満願寺町で実施した、「古屋敷遺跡」の第3次発掘調査の概要報告書である。

2. この調査は下記の組織で実施した。

(調査主体) 大和郡市教育委員会

(調査担当) 同 技師 山川均・濱口芳郎

(調査作業員) 岸田勝信、堀川正治、米田利男、杉山典三、尾崎明、大橋一夫、谷渕喜一、今西卯之松、喜多みえ子

(調査補助員) 下大迫幹洋(奈良大学)

3. 本概報は下記の分担により作成した。

〔製図・トレース〕

下大迫、荒木浩司、伊藤敬太郎、本村充保(以上奈良大学)、武田浩子

〔写真撮影〕

(遺構) 山川、濱口

(遺物) 濱口

〔執筆・編集〕

山川、濱口

4. 発掘調査時より関川尚功氏(奈良県立橿原考古学研究所)には終始有益な御助言をいただきた。また、本概報作成にあたり、今尾文昭氏(奈良県立橿原考古学研究所)、北野隆亮氏(田原本町教育委員会)をはじめとする、大和古中近研究会会員の方々には、貴重な御教示を賜った。記して感謝の意を表します。

本文目次

I. 調査の契機および経過.....	1
II. 調査地の位置および環境	
1. 地理的環境.....	2
2. 歴史的環境.....	2
III. 調査の概要	
1. 既往の調査.....	3
2. 調査方法.....	3
3. 検出遺構等.....	4
4. 出土遺物.....	6
IV. まとめ.....	12

図目次

図1. 調査地周辺の遺跡 (S : 1/20,000)	1
図2. 調査地位置図 (S : 1/5,000)	3
図3. トレンチ配置図 (S : 1/600)	4
図4. トレンチ土層断面図 (S : 1/80)	5
図5. 出土遺物実測図I (S : 1/3)	7
図6. 出土遺物実測図II (S : 1/3)	8
図7. 出土遺物実測図III (S : 1/3)	10
図8. 出土遺物実測図IV (S : 1/3)	11

図版目次

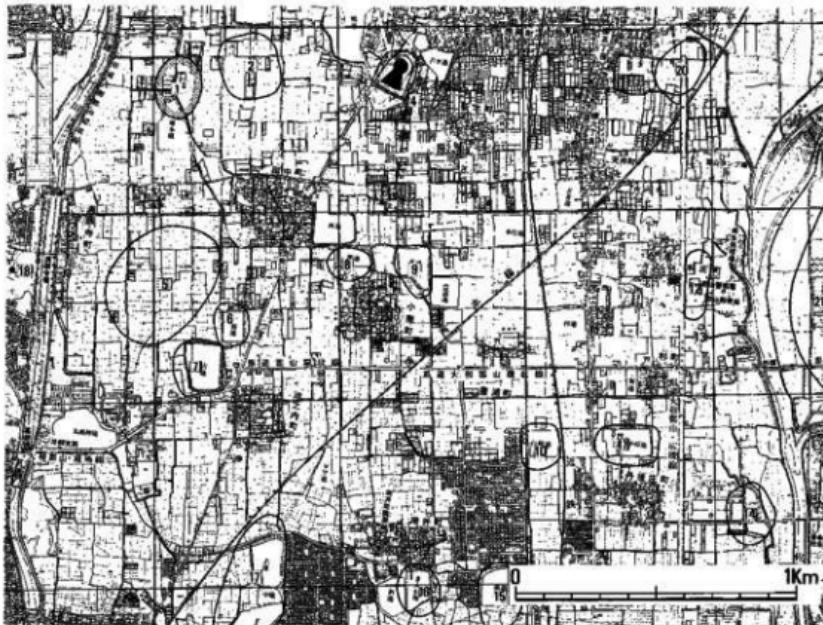
図版1. 1 第4トレンチ完掘状況 (南東より)	
2 発掘風景	
図版2. 遺物 I	
図版3. 遺物 II	
図版4. 遺物 III	
図版5. 遺物 IV	
図版6. 遺物 V	

I 調査の契機および経過

今回の調査は、大和郡山市の計画している大和中央道バイパス道路建設ならびに、これと並行して計画される奈良県水道局の水道管理設に伴うものである。開発者が県・市の両者であることから、県教育委員会と協議した結果、開発地北半部を奈良県立橿原考古学研究所が、南半部を市教育委員会が担当することになった。

調査は、奈良県立橿原考古学研究所が先行しておこない、市教育委員会は、平成2年6月6日より6月18日まで実施した。調査面積は約60m²であった。

なお、調査の先行した、橿原考古学研究所の調査を古屋敷遺跡第2次調査、これに続く市教育委員会の調査を古屋敷遺跡第3次調査とする。



番号	遺跡名	時代	所在地
1	古屋敷遺跡	縄文～近世	田中町
2	遺物散布地	奈良	田中町無内、宮内
3	外川遺跡	赤生(後)	外川町
4	新木山古墳	古	塘(後)新木町丸山
5	高野寺遺跡	古	境、庭寺町
6	遺物散布地	奈良～室町	池之内町出口
7	遺物散布地	奈良～室町	池之内町古池
8	遺物散布地	古	境
9	遺物散布地	奈	小南町新池
10	遺物散布地	古	丹波後庄町白坂地
11	遺物散布地	奈	良丹後庄町小泉
12	本庄・杉町遺跡	良丹～平安	杉町
13	古墳?	本庄町川延	杉
14	遺物散布地	中世	丹波後庄町
15	下ノ田遺跡	古	境
16	遺物散布地	奈良	北西町万葉地
17	遺物散布地	古	境小林町高月
18	古	18	古
19	郡山城跡	近世	市内町ほか
20	南鬼塚遺跡	古墳～近世	市内町ほか
21	神田・若狭遺跡	奈生～中世	神田町ほか

図1 調査地周辺の遺跡 (S: 1/20,000)

II 調査地の位置および環境

1. 地理的環境

古屋敷遺跡は、大和郡山市西半部を南北に貫流する富雄川の東岸、矢田丘陵・西ノ京丘陵の東南に広がる緩傾斜扇状地上に位置する。この扇状地はかつて鳥趾状に網流していた富雄川によって形成されたもので、この地域での過去の発掘調査においても、しばしば河道跡を確認している。また、この付近に点在する溜池も旧河道を利用したものがある。現在の富雄川は近世の治水事業によって、扇状地の扇側端を流下するようになった。従って、現在の富雄川西岸を丘陵地、東岸を扇状地ということができる。遺跡付近は、北から南へごく緩やかに傾斜し、標高は59m前後である。

2. 歴史的環境

古屋敷遺跡を中心として、大和郡山市西半域の遺跡を概観してみると、地形によって時代的にあるいはまた性格的に、遺跡が偏在することが知られる。このことについてはすでに研究がなされて（註1）おり、ここでは詳述しないが、富雄川西岸に所在する諸遺跡は、弥生時代には集落として、古墳時代には墓域として活用されている。この地域のそれ以前の遺跡については現段階では不明瞭な点が多く慈光院裏山遺跡でわずかに有舌尖頭器が1点、またやや下流に位置する原田遺跡で縄文時代後期の土器が確認されているにすぎない。さて弥生時代の遺跡を具体的に遺跡名を上げて説明すると、（註2）（註3）（註4）（註5）（註6）富雄川西岸には外川遺跡、西田中遺跡、慈光院裏山遺跡、小泉遺跡、菩提山遺跡等が点在する。このうち西田中遺跡・慈光院裏山遺跡では住居址が検出され、また、小泉遺跡では方形周溝墓の存在が確認されている。これらの遺跡はいずれも弥生時代中期から後期にかけて出現し、古墳時代には（註7）（註8）継続せず消滅し、かわって古墳時代には、六道山古墳、小泉大塚古墳等の在地首長墓クラスの前方後円墳が出現し、また中期以降には菩提山1・2号墳等の小型古墳も造営される。後期には横穴式（註9）石室も導入され、笹尾古墳が造営される。歴史時代にはこの地域の遺跡は極端に希薄となり、わず（註10）（註11）かに西田中瓦窯、小泉城跡がみられるにすぎない。

一方富雄川東岸では、微高地に遺跡が立地する。縄文時代にまさかのばる遺跡としては古屋敷遺跡以外いまのところ確認されたものはないが、弥生時代には、古屋敷遺跡が継続して営まれる。しかしながら、弥生時代はむしろ富雄川西岸地域の方の開発が著しく、この地域は古墳時代以降に（註12）（註13）本格的な開発が行われたようである。集落では満願寺遺跡、下ノ田遺跡等、古墳では新木丸山古墳がそれである。つまりこの時期より、この地域での低湿地が水田として開発され、微高地に集落を営むことがおこなわれ、中近世を経て現在ある村もまた、そのようであることには変わらない。

III 調査の概要

1. 既往の調査

古屋敷遺跡を最初に紹介したのは秦鳳月氏で、塚本池より石鏃、弥生上器の採集されことを報告（註14）された。この報告はその後空白時期はあったものの、『大和郡山市史』や『奈良県遺跡地図』に活（註15）かされている。

古屋敷遺跡で発掘調査が行われたのは最近のこと、1986年に奈良県水道局ポンプ場建設とともに（註16）奈良県立橿原考古学研究所が塚本池北側で実施した。この調査で、弥生時代の土壌、溝が検出されたのに加え、それより遡る、縄文時代後期・晩期の遺物も自然流路内より出土した。また中近世の井戸、土壙等も検出されている。

2. 調査方法

本調査に先行して、県の調査が実施され、調査地南半には溝の存在することが判明していた。この結果を受けて、本調査では、溝南岸の確認を主なる目的とし、県調査時に設定されたトレンチに

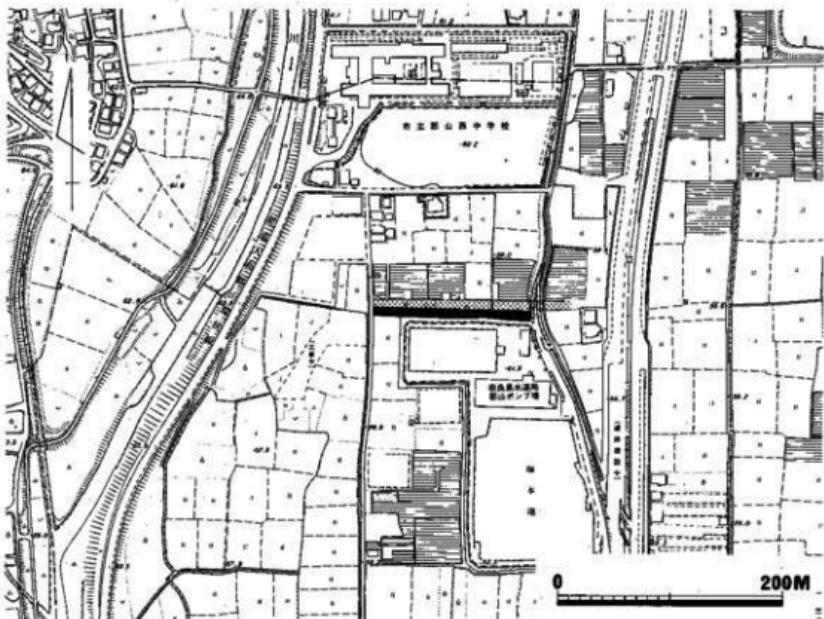


図2 調査位置図 (トーン部分は県調査地、黒塗り部分は市調査地、S : 1/5,000)

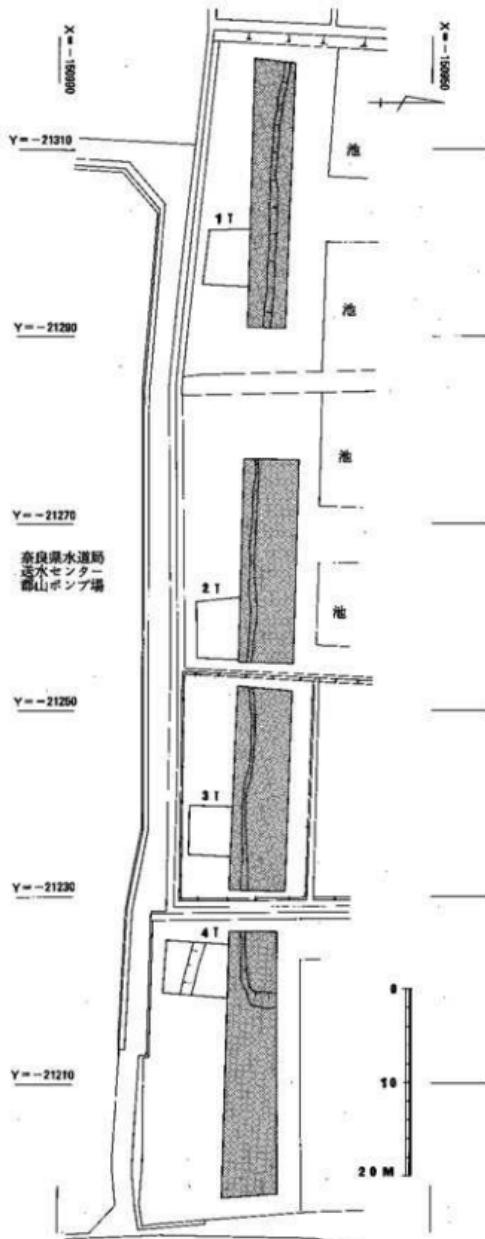


図3 トレンチ配置図 (S: 1/600)

(トレンチ部分は県調査地)

接するかたちで、西から第1トレンチ（東西5.8m、南北4.4m）、第2トレンチ（東西6.0m、南北4.5m）、第3トレンチ（東西5.2m、南北5.2m）、第4トレンチ（東西5.5m、南北6.6m）の計4ヶ所のトレンチを設定した。

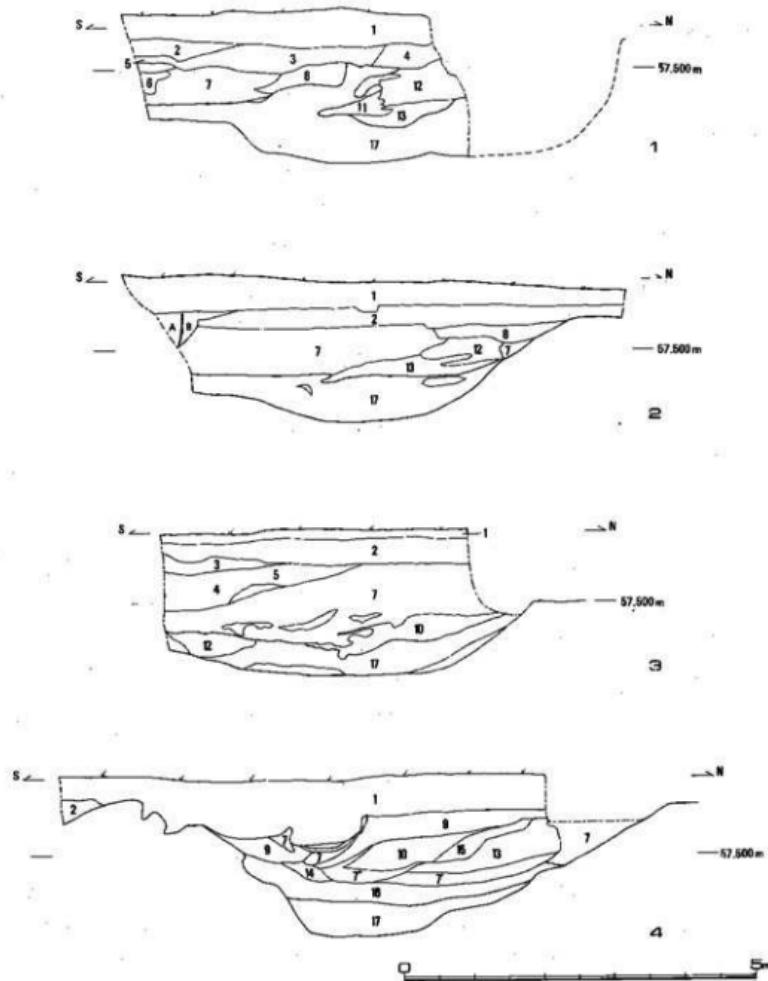
掘削は重機により客土層を除去、以下の溝埋土は人力により掘削を行ったが、壁土の崩落が激しく、一部重機によって掘削を行った。

2. 検出遺構等

客土層（第1・2層）を除去すると、溝埋土が検出された。溝埋土は、大きく3つに分けられ、上部グライ土層、砂礫層、下部グライ層より構成される。上部グライ土層は主に砂、シルト層よりなり、若干の遺物を包含する。砂礫層は灰白色を呈し、遺物を含まない。下部グライ層は主にシルト層よりなり、今回の調査で出土した遺物の大半はこの層からのものである。

溝の深さは最深部で約2.3m、平均約2.0mである。溝の南岸は、1～3トレンチでは確認できず、第4トレンチでのみ確認された。この知見より、溝の幅は約7mと判明した。

遺物の出土量は、第1トレンチが最も多く、東に行くに従ってその量は減少していく。



1. 黒土層 I
 2. 灰青色粘砂層
 3. 黒土層 II (地山土を含む)
 4. 淡黃灰色粗砂層
 5. 灰色粗砂層
 6. 淡綠色砂層
 7. 青灰色粘性シルト層
 7' 青灰色粘性シルト層 (シルト質)
 7'' 青灰色粘性シルト層 (粘土質)
 8. 灰褐色シルト層 (7層凍化層)
9. 灰色砂層 (7層土ブロック含む)
 10. 灰色砂層
 11. 喀褐色粘質土層
 12. 乳白色砂層
 13. 雪白色粗砂層
 14. 喀灰色砂層
 15. 喀灰色砂礫層
 16. 淡灰色砂礫層
 17. 青灰色粘土層
- A. 喀灰色砂質土層 (井戸埋土)
 B. 灰色砂質土層 (井戸ホリカタ)

図4 トレンチ土層断面図 (1. 1T西壁 2. 2T東壁 3. 3T西壁 4. 4T東壁 S: 1/80)

3. 出土遺物

出土した遺物は、土師質土器、瓦質土器を中心に、陶磁器、漆器、瓦塙等であった。

土師質土器（図5-1～4）

土師質土器は、2点の小皿を除いて、すべてがいわゆる大和型の羽釜であり、50個体以上の出土を確認した。そのほとんどは、第1・第2トレンチからの出土で、特に第1トレンチでは羽釜の出土総数の過半数を占めている。基本的形態は同じで、偏平な体部に「く」字状に屈曲させ、端部をつまみあげた口縁部を持ち、鈎は体部最大径部に位置する。大きさによって大小2種類のタイプにわけることができ、小型のものは、口径16cm前後、最大径19cm前後、器高が12cm前後で、1、2がこのタイプに属す。大型のものは、口径23cm前後、最大径28cm前後で3、4がこれに属す。器壁はかなり薄く、色調は黄白色で、胎土は緻密、調整は内外面ともきれいにナデを施すが、一部ハケ調整の痕跡の残るものもある。また、体部内面上半に円形圧痕の認められるものがある。出土量は、大型のものが圧倒的に多く、小型はわずか5点にすぎない。

瓦質土器（図5-5、図6-6～13、図8-28・29）

瓦質土器は、出土遺物総数の半数近くを占め、主な器種は、羽釜、擂鉢、火鉢、甕である。

瓦質羽釜は、土師質の羽釜に比べ、出土量は極めて少なく、わずか9点を数えるのみである。口縁部の形態は、直立し端部に面をもつものと、内傾し端部を丸くおさめるものと2種類にわかれる。28は前者に属すもので、第1トレンチより出土した。口縁下に2条の凹線を巡らせ、幅2cmの鈎を付ける。調整は内外面ともナデを施す。断面の色調は明赤橙色を呈し、胎土には砂粒を混じる。口径36.6cm、最大径42.3cmである。5は、後者に属すもので、口縁端部直下に1条、それより下方に2条の凹線を巡らせる。調整は内外面ともナデを施す。胎土は粗く、かなり硬質であるが器壁は薄い。口径32cm、最大径39.4cmを測る。

調理用具には、擂鉢、こね鉢があるが、その出土量は圧倒的に擂鉢が多く30個体を数える。これに比べ、こね鉢はわずか2個体の出土にとどまった。6のこね鉢は、第1トレンチから出土したもので、体部は内窵ぎみに外へ開き、口縁部はやや上方へたちあがり、端部を丸くおさめる。調整は、外面上半がナデ、下半は指押え、内面は幅約5mmの暗文を格子状に施す。口径24.8cm、器高9.2cm。7の擂鉢も、第1トレンチ出土のもので、体部を内窵させつつ外方に開く。口縁部外面を外に折り、端部は丸くおさめる。口縁端部内面はケズリによって明瞭な稜線をなす。調整は外面ではタテハケの後ナデ、内面はナデの後9本を1単位とするクシガキを7帯施す。口径23.4cm、器高11.9cm。

火鉢は、そのほとんどが文様帶のない、直線的に外反する体部を持つ、浅鉢型、深鉢型で逆台形の足を有するものである。10もその一つで第1トレンチより出土した。口縁部内側に長さ10cm、幅1.5cm、厚さ0.8cmの受け部をもつ。外面の調整は縦方向のミガキ、口縁下1cmの部分のみ横方向の

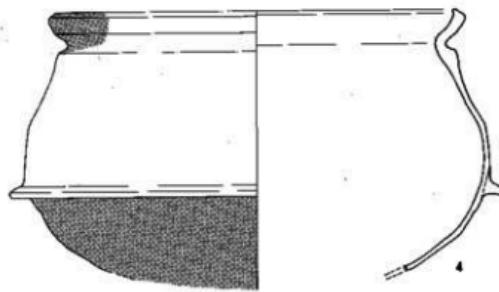
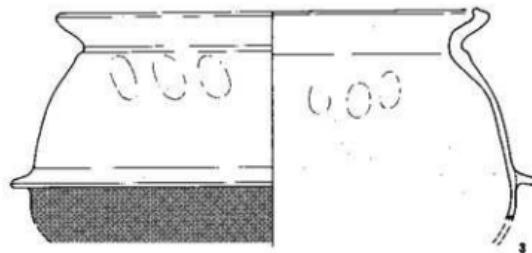
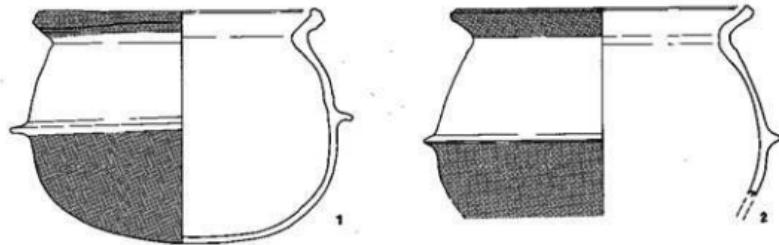


図5 出土遺物実測図 (S : 1 / 3)

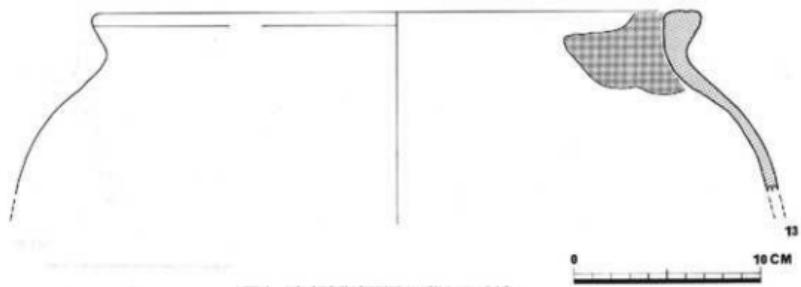
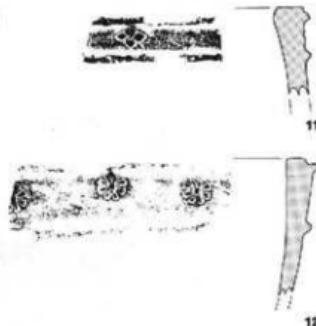
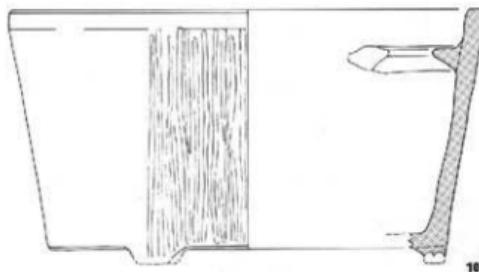
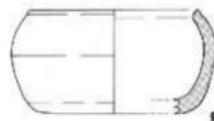
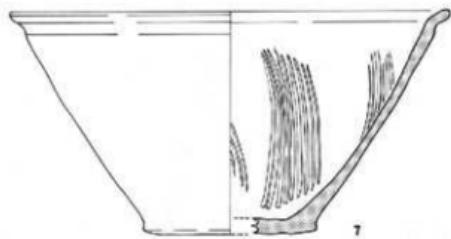
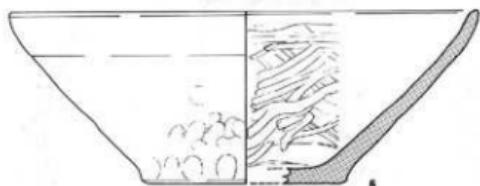


図6 出土遺物実測図II (S : 1 / 3)

ミガキを施す。内面はヨコナデを全面に施す。口径23.8cm、器高13.5cm。11、12はスタンプ文を施すもので、この他にも2点が確認されている。両者とも口縁下に2条の突線を巡らせ、突線間に前者は菱形文を、後者は花文を押圧する。調整は外面をナデ、内面をミガく。

13の甕は第1トレンチより出土している。表面は桃色を帯びた白色を、裏面は灰褐色を呈す。口縁部を肥厚させ端部は面をもつ。29は第4トレンチよりほぼ完形で出土したものである。外面はナデられているが一部にタタキの痕跡を残す。口径60.4cm、器高59.4cm。

その他の瓦質土器には、小型羽釜（8）、小型壺（9）、土管がある。8は第1トレンチより出土し、体部中央に鈎をもち、口縁は内傾する。口縁端部には1条の沈線を巡らせる。調整は内外上半および鈎をナデ、外面下半をケズり、内面下半を指抑えする。鈎の下には煤が付着し、また内面下半にも黒色の付着物が認められることから実用品のようである。9も第1トレンチより出土し、偏平な体部にわずかに突出する口縁部を有する。体部下端に底部方向への粘土をなでつけた痕跡が残るが、それ以外は丁寧にナデ調整を施す。口径9.0cm、最大径11.0cm、器高5.5cm。

陶磁器（図7-14~21）

陶磁器には唐津、備前、美濃瀬戸等の国産陶器と中国産の磁器がみられる。14、15は美濃瀬戸の天目で、体部はやや内弯しつつ外に開き、口縁下1cmのところで内側に屈曲し、再び外へ開く。高台はケズり出し、底裏は内反りである。高台のまわりを除いて全体に鉄釉をかける。口径12cm、器高5.7cm。16、17、18は唐津である。16は碗で、高台より1.5cm部分より微妙に内弯しながら外反する。高台は削り出し輪高台で、露胎部は体部中央にまでおよぶ。17の小皿は、やわらかな曲線の体部に削り出しの高台を持つ。緑釉を施し露胎部は暗茶色となる。口径10.4cm、器高3.3cm。18は鉢で灰釉を施し、見込み部に胎土目痕を有す。19、21は中国産青花である。21は小皿で口縁端を開き、外面に唐草文、内部は花文を施している。口径9.4cm、器高2.5cm。22は、肩部に耳を持つ壺で、第4トレンチより出土した。体部はロクロ形成による凹凸がはげしい。口径13.9cmを測る。

漆器（図7-23、24）

漆器は第2トレンチより2点が出土している。23は内面朱漆、外面黒漆で仕上げられた椀である。24も同様に仕上げられているが、漆の遺存度は23に比べて悪く、また見込み部に文様を描いたようである。

その他（図7-25~27）

25は十馬である。第2トレンチより出土した。胴体下半部のみが遺存していた。26は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で中房に1-4-8の宝珠を配し、外区内縁は連珠帶、外縁は面違い鋸齒文を施す、平城宮式6272B形式で第2トレンチより出土した。27は左三巴の軒丸瓦で、圓線で画された外区は連

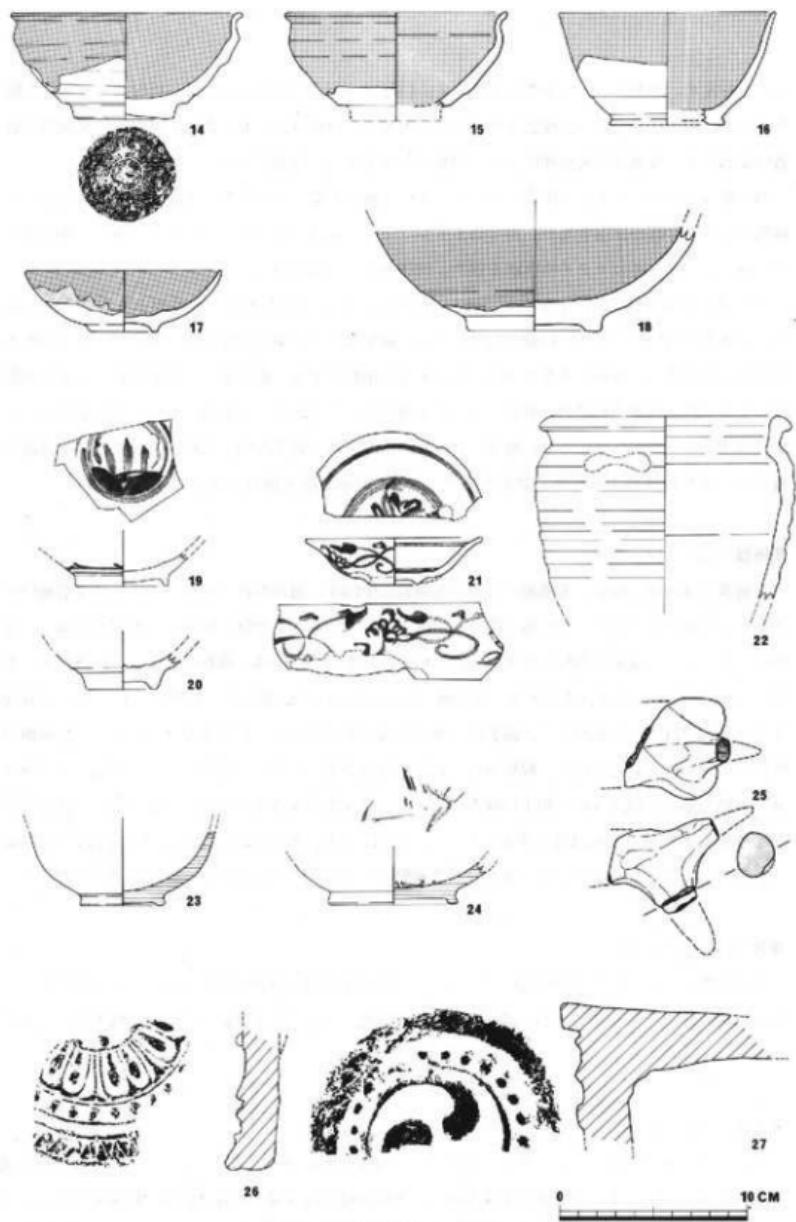


图7 出土遗物III (S: 1/3)

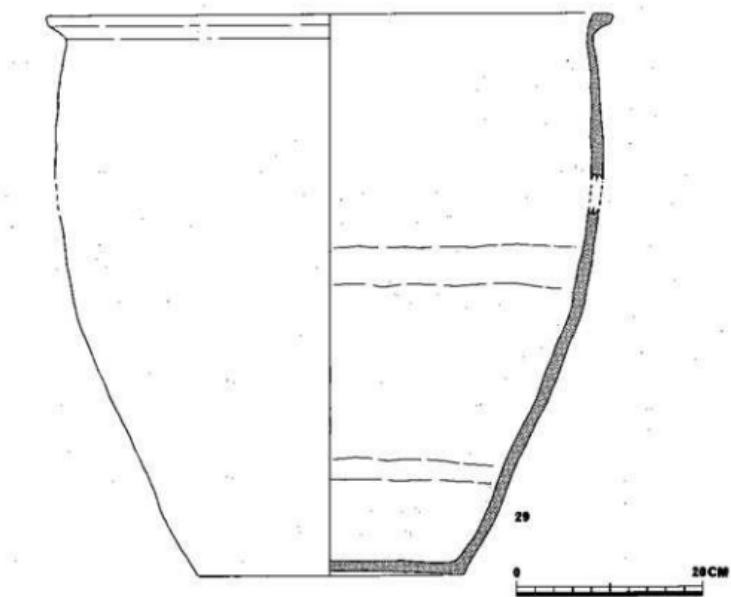
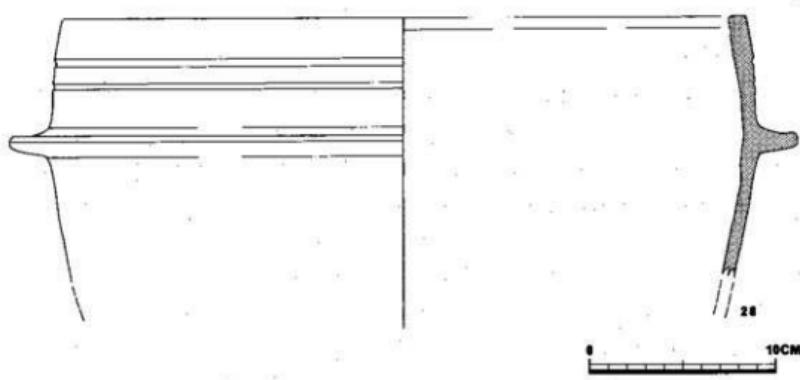


図8 出土遺物IV (28 S: 1/3、29 S: 1/6)

珠帶を施す。巴の尾は半回転し、圓線に接するが合流することなく、陰起差によって区別している。巴の頭部は偏平で尖りを残す。色調は表面が暗灰色、断面は灰白色で、かなり硬質である。

IV まとめ

本調査は、先述のように溝の中の発掘という特異なものであったため、資料的にも非常に断片的なものにならざるを得なかったが、確認できた知見をまとめてみる。

まず、中世の遺跡の北限を示す古屋敷集落の環濠と推定される溝の一部を検出した。この溝は、幅約7m、深さ約2mの断面逆台形を呈す。溝内の遺物は、ほぼ16世紀後半に限定され、しかも第2次調査では天正元年（1573）銘をもつ金泥墓碑も出土していることから、この溝の埋設時期の上限を知ることができる。また上下グライ層出土資料にもそれほどの時期差が認められないことから、溝の埋設は極めて短期間になったものであることがわかる。これはこの地域に言い伝えられる、富雄川の洪水で消滅した集落の伝承とも合致してくる。

繩文、弥生時代の遺物は今次調査では出土しなかった。この時期の集落範囲はこの部分にまでおよばなかったことを示す。今後こうした遺跡範囲の確認をも含めて調査に取り組んでいきたい。

〈註〉

- 註1. 山川均「地形的条件から見た遺跡の立地および分布状況—大和郡山市を中心として—」『文化財学報』第7集 奈良大学文学部文化財学科 1989年
- 註2. 寺沢薰『六条山遺跡』(奈良県文化財調査報告 第34集) 奈良県立橿原考古学研究所 1980年
- 註3. 服部伊久男『西田中遺跡発掘調査概要報告書』大和郡山市教育委員会 1985年
- 註4. 奈良県立橿原考古学研究所と大和郡山市教育委員会が1985年に調査、報告書未刊。
- 註5. 長谷川俊幸『小泉遺跡』『奈良県遺跡調査概報』1982年度 奈良県立橿原考古学研究所 1983年
- 註6. 服部伊久男『菩提山遺跡発掘調査概要報告書』大和郡山市教育委員会 1988年
- 註7. 白石太一郎『六道山古墳』『奈良県の主要古墳』I 奈良県教育委員会 1971年
- 註8. 伊達宗泰『小泉孤塚・大塚古墳』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第23冊) 1966年
- 註9. 東潮「笛尾古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度 奈良県立橿原考古学研究所 1983年
- 註10. 京谷康信『奈良時代窯跡調査概報』『考古学雑誌』4-1 1932年
- 註11. 村田修三『小泉城・陣屋』『日本城郭大系』第10巻 新人物往来社 1980年
- 註12. 藤井利章『満願寺遺跡発掘調査概要』『奈良県遺跡調査概報』1982年度 奈良県立橿原考古学研究所 1983年
- 註13. 末永雅雄『日本の古墳』1961年
- 註14. 奏鳳月『大和における新発見の遺物採集地報告』『考古学雑誌』26-6 1936年
- 註15. 小島俊次『考古学的考察』『大和郡山市史』1966年
奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡地図』第1分冊 1971年
- 註16. 林部均『古屋敷遺跡』『奈良県遺跡調査概報』1986年度 奈良県立橿原考古学研究所 1989年

図 版



1 第4トレンチ完掘状況（南東より）



2 作業風景



圖版 3
古屋敷遺跡 第3次（遺物Ⅱ）



6



8



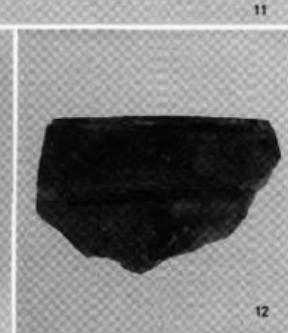
7-a



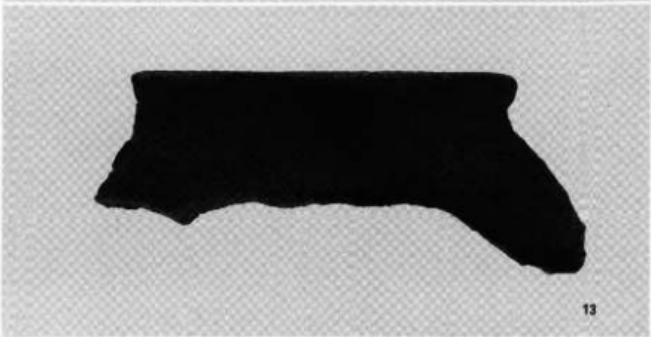
9

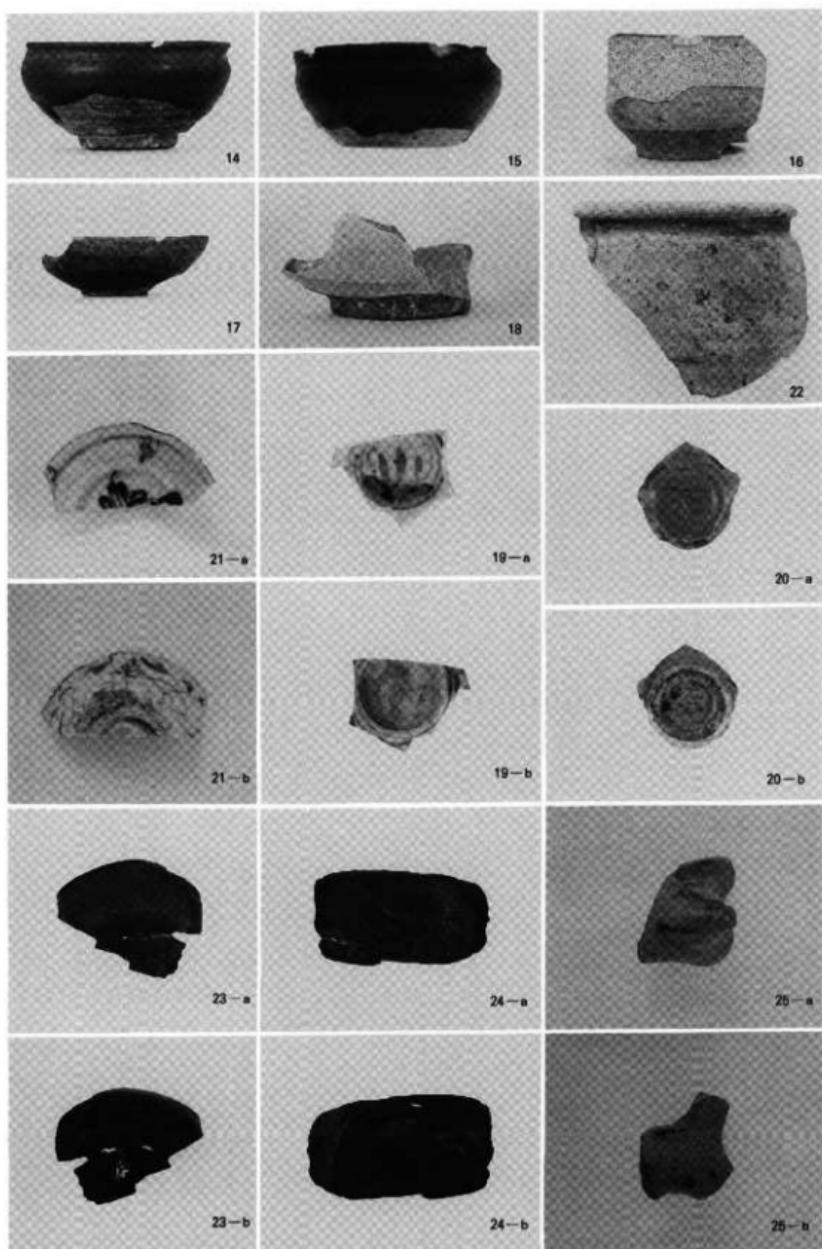


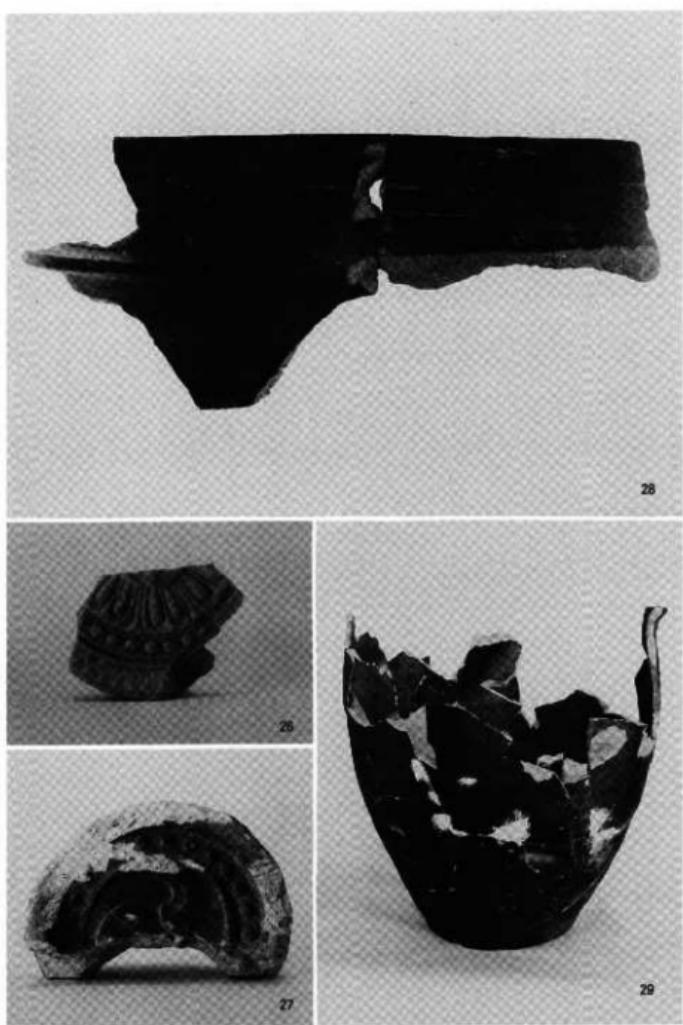
7-b



12







大和郡山市文化財調査概要22

古屋敷遺跡

第3次発掘調査概要報告

平成3年3月31日発行

編集 発行 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北郡山町248-4

印刷 明新印刷株式会社
奈良市橋本町36
